

高松市埋蔵文化財調査報告 第180集

都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊

# 多肥平塚遺跡

2017年3月

高松市教育委員会

## 例言

- 1 本報告書は高松市都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市多肥上町に所在する多肥平塚遺跡（たひらつかいせき）に関する報告である。
- 2 発掘調査地及び調査期間は、次のとおりである。  
調査地： 高松市多肥上町  
発掘調査：平成28年6月14日～平成28年7月27日  
整理作業：平成28年10月1日～平成29年3月31日
- 3 発掘調査及び整理作業は、高松市教育委員会が実施した。ただし、地方自治法第180条の7に基づく補助執行により、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 渡邊誠、香川将慶が担当した。
- 4 本報告書の執筆及び編集は、香川が担当した。
- 5 本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
- 6 本書の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1の地形図「高松南部」を一部改変して使用した。
- 7 本報告のうち標高値を示したものは海拔高を表し、方位は座標（世界測地系）の北を示す。
- 8 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。  
S D：溝跡 S K：土坑 P：ピット
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査の経緯 .....	1
第2節 発掘調査・整理作業の経過 .....	1
第2章 地理的・歴史的環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の成果 .....	4
第1節 調査地の概要と基本層序 .....	4
第2節 遺構 .....	4
第3節 遺物 .....	10
第4章 まとめ .....	11
写真図版 .....	
報告書抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 調査地位置図 .....	1
第2図 周辺遺跡地図 .....	3
第3図 遺構平面図 .....	5
第4図 東西基本土層図 .....	6
第5図 南北基本土層図 .....	7
第6図 SD-1・SK-1・SK-2 平・断面 .....	8
第7図 SK-3・SK-4・SP-1 平・断面図 .....	9
第8図 遺物実測図 .....	10

## 挿表目次

第1表 出土遺物観察表 .....	10
-------------------	----

## 写真図版目次

図版 1-1 基本土層東西面 (南から)	5 SK-1 完掘状況 (南から)
2 SD-1 土層断面 (南から)	6 調査区全景 (南から)
3 SD-1 完掘状況 (南から)	7 噴霧確認状況 (南から)
4 SK-1 土層断面 (北から)	8 出土遺物

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

平成27年度に当該地において、高松市（道路整備課）が都市計画道路朝日町仏生山線整備事業を実施するにあたり、高松市教育委員会（補助執行により高松市文化財課）に埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は、当初、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、「多肥平塚遺跡」に近接することから、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、平成28年3月22日から3月24日の期間に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、当該地で埋蔵文化財の包蔵状況を確認したことから、近接する「多肥平塚遺跡」の一部と判断し、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行うとともに、事業実施に当たっては埋蔵文化財の保護が必要である旨を伝えた。

高松市から6月9日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が高松市教育委員会（以下、市教委）に提出された。その通知を香川県教育委員会に進呈したところ、香川県教育委員会から28年6月13日付けで事前の発掘調査を実施する旨の行政指導があったため、高松市と協議した結果、市教委を主体に発掘調査を実施することになった。

### 第2節 発掘調査・整理作業の経過

上記の経緯によって、下記の範囲（図1）を発掘調査することになった。平成28年6月14日より重機掘削を開始し、7月27日に事務所を撤去し現地調査を終了した。調査の経過は下記の調査日誌のとおりである。

調査区の設定は既存のコンクリート駐畔を境にA区及びB区とした。

#### 調査日誌

- 6月13日（月） 事務所設置。
- 6月14日（火） 重機掘削、遺構確認。
- 6月16日（木） 基準点設置。
- 6月17日（金） 重機掘削終了。
- 6月20日（月） 遺構掘削開始。
- 6月23日（木） 現場水没。
- 7月12日（火） 遺構全体図作成開始、基本土層図の作成。
- 7月20日（水） 遺跡全景写真撮影。
- 7月21日（木） 埋戻し開始。
- 7月26日（火） 埋戻し終了。
- 7月27日（水） 事務所撤収、現場終了。



第1図 調査地位置図

整理作業は10月1日より遺物の洗浄、実測及び図面のトレースを行い、11月1日より執筆及び編集作業に取り掛かり、平成29年3月31日に報告書の刊行をもって完了した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島、立石山塊、淨願寺山、西部に青峰、堂山の山系が連なり、石清尾山が平野中央部に存在する。いずれも約1400万年前の火山活動によって噴出した溶岩が侵食されたメサ、あるいはピュート型の溶岩台地で、20～300mの低い山地である。北方は瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島等の島々も市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

多肥平塚遺跡が立地する高松平野の微地形や形成過程については、高橋学氏により詳細な分析がされている（高橋 1992）。高松平野は、大局的に周縁部から山地域・丘陵域・平野域の順に地形を分類することが可能であるとされる。ただし、平野中央部や北端の海岸部付近にも石清尾山塊や屋島等、複数みられる。詳細にみると、山地・丘陵地縁辺部に更新世の川床低下により形成された段丘面がみられ、さらに海浜部に向かって、三角州帯や自然堤防帶などの沖積面が広がる。一般的に沖積平野の形成過程は山地・丘陵地から沖積面へと移行する部分に扇状地帯が、海浜部近くに三角州帯が形成され、その中間に自然堤防帶が形成される。しかし、高松平野をはじめとする瀬戸内海地域の多くの平野部は、山から海までの距離が短く、河川規模が小さいことから、扇状地帯の上に自然堤防帶が重複する現象がみられると指摘されている。

完新世地形である沖積面についてみると、その変遷過程が読み取れる。沖積面は当初、高松平野を流れる香東川などの主要な河川の本流から細かく枝分かれした複数の自然流路の埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとした微高地等の存在により、比較的起伏にとんだ地形面を呈していたことが、微地形分析や既往の発掘調査等により明らかになっている。

多肥平塚遺跡の周辺の地形は南から北へ若干傾斜する平地に立地する。所々に自然堤防と推定される微高地が見られる存在、農業用水を確保するため数多くのため池が存在し、出水（ですい）と呼ばれる自噴地下水脈が確認されている。調査地周辺では、栗木出水、平井出水、鈴木出水などが見られる。調査区内でも出水と考えられる噴出地を確認した。

### 第2節 歴史的環境

高松平野における遺跡の様子は、大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）等に伴う事前調査により、解明されつつある。今回の調査地である多肥上町周辺も香川県立高松桜井高等学校の建設（多肥松林遺跡）や都市計画道路の建設（多肥松林遺跡、多肥宮尻遺跡等）に伴う事前調査が行われ、埋蔵文化財の包蔵状況を知ることができた。

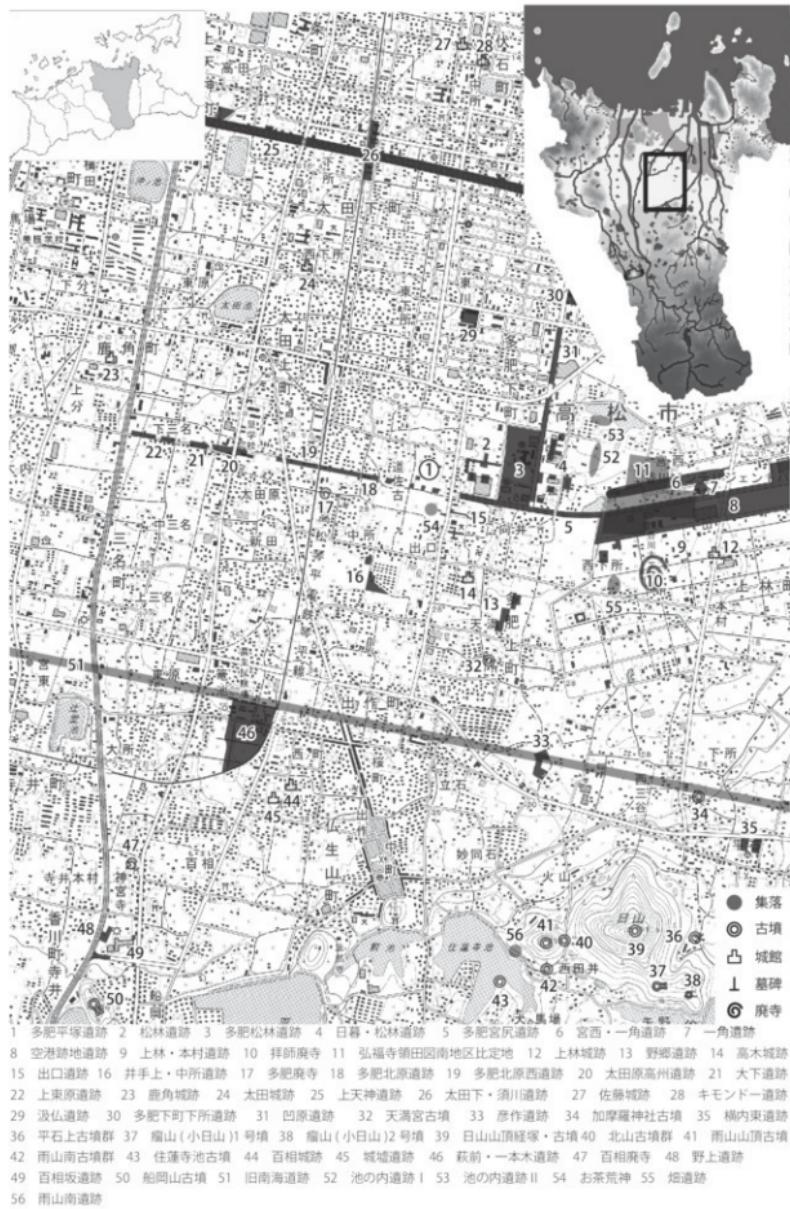
周辺地域の遺跡については以下のとおりである。

多肥北原遺跡では7世紀～奈良時代頃の竪穴建物跡及び掘立柱建物跡が検出された。緑釉陶器や灰釉陶器が出土し、近くに比定される多肥廃寺との関わりも指摘されている。

太田原高洲遺跡では弥生時代中期後葉の区画墓7基を確認し、同時期の墓域構成が分かる香川県内初めての事例である。主体部からは水晶製算盤玉7点が出土し、丹後半島周辺で製作されたものが持ち込まれた可能性がある。

多肥松林遺跡はこれまで複数箇所で発掘調査が実施され、特に高松桜井高等学校建設に伴う発掘調査では大規模な調査が行われ、多くの成果が得られている弥生時代から近世にかけての集落遺跡である。弥生時代には竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝跡、旧河道が確認された。弥生土器をはじめ、分銅形土製品、農耕具や銅劍形といった木器が出土している。古墳時代から平安時代に竪穴建物跡、掘立柱建物跡が確認された。須恵器や土師器等の土器類に、墨書き器、風字硯、祭祀に使用したと考えられる斎串が出土している。

松林遺跡は繩文時代から平安時代にかけての集落遺跡である。この遺跡の特徴として弥生時代中期ごろに発生した地震と考えられる噴礫が確認された。この噴礫には供獻土器と考えられる土器が置かれ、「大地を治める」、「災害の供養」等の呪術的なものと考えられる。



第2図 周辺遺跡地図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査地の概要と基本層序

当該地の調査前の状況は水田であり、北側には引き続き水田が広がり、南側は県道太田上町志度線が建設中である。調査区周辺は南西方向に向かい標高が高くなり、周辺には自然堤防の名残と思われる高まりが確認できる。今回の調査区はコンクリート畦畔を挟んで北側をA区、南側をB区とした。

調査の結果、溝1条、土坑4基、ピット9基を確認した。調査区全体では、遺構の密度は希薄でA区の北側とB区の東側に遺構が集中する。調査区は現代の擾乱による破壊や礫層帶が広がる。出土遺物は遺構から出土したものではなく、遺構検出時に出土したもののがほとんどである。

基本層序はA区北壁とA区からB区にかけての東壁によって確認した。基本土層（第4・5図）は現代の耕作土（1層）及び底土（2a層～2c層）の下に暗灰黄色粘質シルト質を中心とした近世以降の遺構面（3a層～3i層）を確認した。その下層から古代以前と考えられる褐灰色粘質シルト層（4a層）と黒褐色粘質シルト層（4b層）が確認された。遺構は4層よりも下面で確認し、この層から高台付帯（第8図-2）が出土している。A区中央及び東端では、出水と考えられる噴出地点が確認された。また、東西基本土層に地震によるものと考えられる噴隙層を確認した（A層）。

さらに、その下層は黄褐色粘質シルト層（5層）と黄灰色砂礫層（6層）が確認され地山と考えられる。北側の限られた範囲でシルト層の地山を確認しており、北側に広がるものと推測される。A区の南半分より南側では礫層が広がっている。

### 第2節 遺構

#### SD-1（第6図）

A区北東側で検出した。遺構の規模は全長約4.5m×幅約40cm、深さ約20cmである。遺構の堆積土は暗褐色シルト質層一層である。北側は擾乱により不明だが、さらに延びるものと考えられる。遺構から出土しておらず、時期は不明である。

#### SK-1（第6図）

A区北東で、SD-1の東側で検出した。遺構の規模は東西約60cm×南北約30cm、深さ10cmである。遺構の堆積土は黒褐色砂質土の単層である。この遺構はSD-1を検出した黒褐色土層より下面の黄灰色土を地山とした堆積層で確認しており、SD-1より古い時期のものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### SK-2（第6図）

B区西側で検出した。遺構の規模は東西約3m×南北約6m20cm、深さ20cmである。遺構の西側は調査区外のため不明である。遺構上面でSP-1を確認し、SK-4を切っている。遺構の堆積土は褐灰色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### SK-3（第7図）

B区西側で検出した。遺構の規模は東西約5m×南北約5m20cm、深さ約10cmである。遺構の北側は畦畔によって破壊されている。遺構上面でSP-2.3.4.5を確認した。遺構の堆積土は暗赤褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### SP-1（第7図）

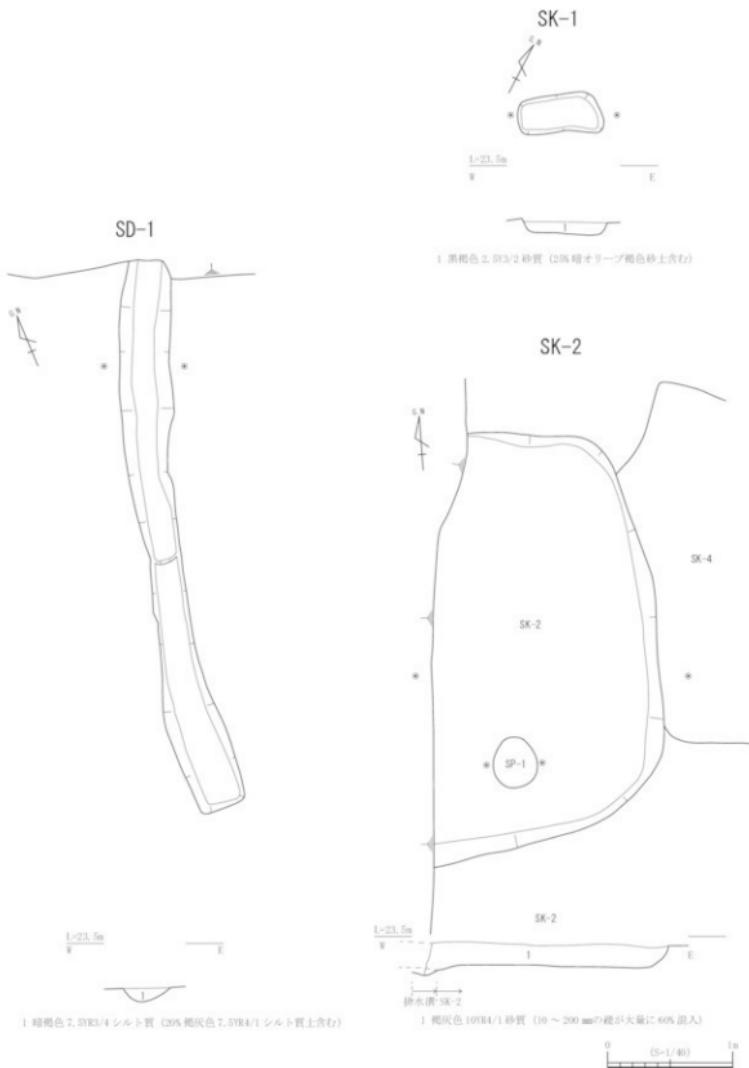
B区西側で検出した。遺構の規模は直径40cm、深さ約10cmである。SK-1を切っている。遺構の堆積土は黒褐色砂質土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



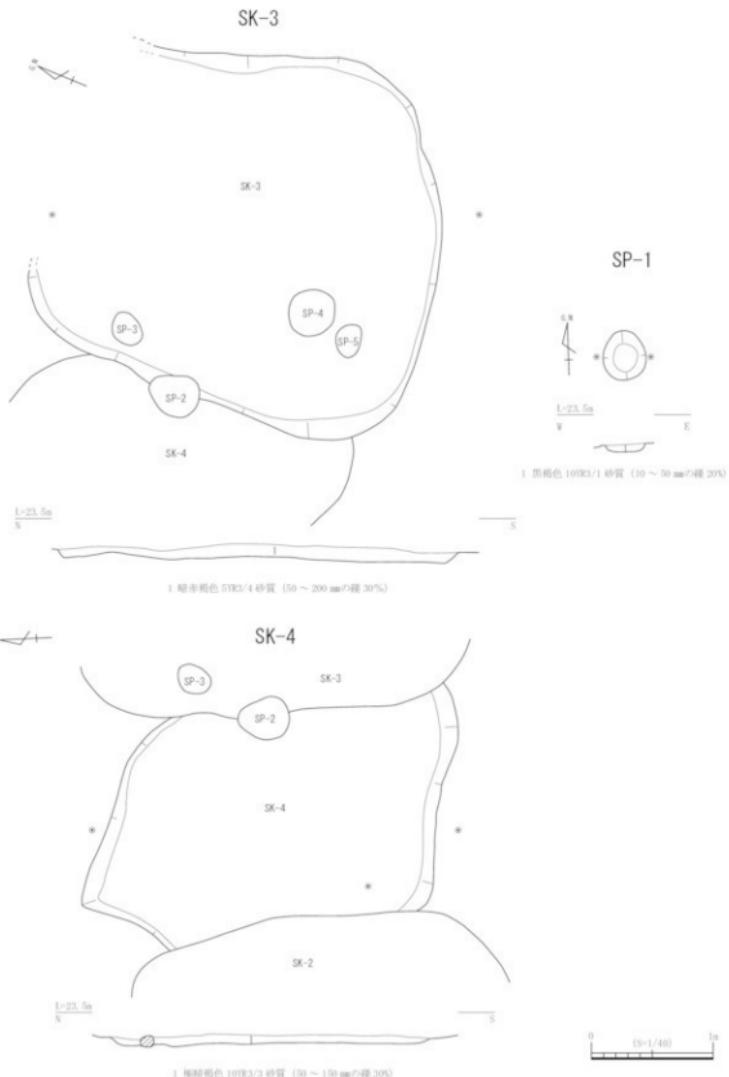
第3図 遺構平面図 (1/160)

東西基本土層図(1/40)

第5回 南北基本土層図（1/40）



第6図 SD-1・SK-1・SK-2 平・断面図



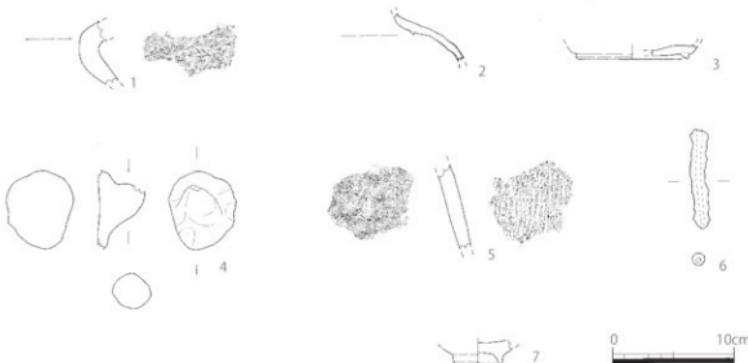
第7図 SK-3・SK-4・SP-1 平・断面図

### 第3節 遺物（第8図）

今回の調査では遺構から出土した遺物ではなく、遺構検出時や遺物包含層等から出土した。出土遺物は須恵器や土師器、釘等である。また、表様であるが、陶器片を採取した。

1は土師質土器の瓶片である。出土場所は基本土層でいう4 b層の遺物包含層から出土した。時期は14世紀末から15世紀初頭と推定される（佐藤2016）。2は東西基本土層4a層から出土した遺物である。須恵器の高台付杯である。高台を回転糸切りした底部に貼り付けている。時期は底部からの立ち上がりが垂直に上がることや底部の規模、高台の形から8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる（佐藤1993）。

その他の遺物は小片のため年代を特定できるものはなかった。



第8図 遺物実測図

遺物 番号	調査区	遺構	種類	基準	法量(cm)			文様・調整		色調 (上=外面 下=内面)	地土	構成
					口径	底径	高さ	外面	内面			
					(5.2)	ナデ	ナデ	10YR7/4に5L1黄橙 10YR7/4に5L1黄橙				
1	A区	遺構上面	土師質 土器	壺				(3.9)	回転ナデ	10YR5/3に5L1褐 N7/0灰白	3mm以下の長石・ 石英・赤色粘土を含む	良
2	A区	黒褐色土(遺物包含層)覆土	須恵器	壺				(9.0)	回転ナデ	N8/0灰 N8/0灰	2mm以下の長石・ 石英・赤色粘土を含む	良
3	A区	土層断面第3層(黒褐色土中)	須恵器	高台杯	(9.0)	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ ヘラ調整	ナデ	10YR7/4褐 10YR7/3浅黄橙	3mm以下の長石・ 石英・赤色粘土を含む	良
4	B区	遺構提出時	土師器	壺				(5.9)	ナデ 指オサエ	ナデ	2mm以下の長石・ 石英・赤色粘土を含む	良
5	B区	遺構提出時	須恵器	不明				(7.0)	平行切き	ナデ	1cm以下の長石・ 石英・赤色粘土を含む	良

遺物 番号	調査区	遺構	種類	法量(cm)			文様・調整		色調	地土	構成
				長さ	幅	厚さ	外面	内面			
6	A区	黒褐色土(遺物包含層)覆土	釘	8.2	1.5	1.0					

遺物 番号	調査区	遺構	種類	基準	法量(cm)			文様・調整		色調	地土	構成
					口径	底径	高さ	外面	内面			
					(3.8)	(2.1)	回転 回転ヘラケズリ	ナデ	10YR7/3浅黄			
7	表探		陶器	底盤						透明		細

表1 出土遺物観察表

## 第4章　まとめ

今回の調査で古代以前の遺構を確認することができた。遺構から出土した遺物はないが、基本土層4a層より8世紀後半から9世紀前半の遺物が出土し、香川県教育委員会による多肥平塚遺跡の調査においても同時期頃の遺構を確認していることから、同じ遺跡と推測される。しかし、遺構の密度は希薄で、多肥平塚遺跡の中でも希薄な部分と推定される。周辺の地形を見ると、調査区は周辺よりも低地で近くに旧河道が存在した可能性がある。香川県教育委員会の調査においても旧河道を検出していることから、多肥平塚遺跡周辺には何本もの旧河道が存在したと考えられ、これに接した微高地の縁辺部に当たると推測される。現に、調査区から出水と考えられる噴水地点が砂礫層部分で確認しており、現在も水脈が活きていると考えられる。

また、東西基本土層で地震が原因と考えられる噴礫の立ち上がりを確認した（図4のA層）。噴礫が起きる現象は地質学的に液状化しやすい条件さえ整えば、激しい地震のもとで、粗い粒子を多く含む地層でも液状化が発生しうるとされる（寒川2001）。噴礫は基本土層4a層の上面で止まっており、9世紀以降から近世の間に発生した地震と推定される。この間における、南海地震等の大規模地震で史書に残る地震の発生は、887年の仁和地震（仁和3年7月30日）（黒板1971）、1099年の康和地震（承徳3年正月24日）（黒板2000）等が挙げられる。これら以外にも史書で確認されない地震によるもの可能性が挙げられるが、このような大規模地震の発生により、噴礫作用が働いたものと考えられる。

## 引用・参考文献

- 大嶋和則1996『松林遺跡』高松市教育委員会  
大嶋和則2004『松林遺跡（第2次調査）』高松市教育委員会  
大嶋和則2006『多肥宮尻遺跡』高松市教育委員会  
黒板勝美1966『国史大系 日本三代実録 後篇』吉川弘文館  
黒板勝美1973『日本紀略 後篇・百鍊抄』吉川弘文館  
佐藤竜馬1993『香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年』『考古学論叢：関西大学考古学研究室開設四拾周年記念』関西大学考古学研究室  
佐藤竜馬2016『讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1）9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種』『香川県埋蔵文化財センター年報平成26年度』香川県埋蔵文化財センター  
寒川旭2001『遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果』『活断層・古地震研究報告1』活断層研究センター  
高橋学1992『高松平野の地形環境 - 弘福寺領山田郡田団比定地付近の微地形環境を中心に - 』『讃岐国弘福寺領の調査 - 弘福寺領讃岐国山田郡田団調査報告書』高松市教育委員会  
山下平重1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会  
山下平重・歳本晋司2013『多肥平塚遺跡』香川県教育委員会



# 写真図版



1 基本土層東西面（南から）



2 SD-1 土層断面（南から）



3 SD-1 完掘状況（南から）



4 SK-1 土層断面（北から）



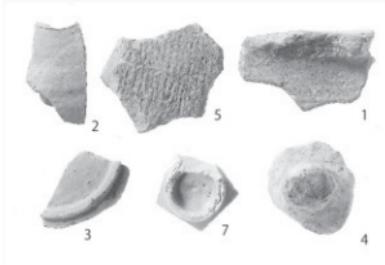
5 SK-1 完掘状況（南から）



6 調査区全景（南から）



7 噴礫層確認状況（南から）



8 出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

都市計画道路朝日町仏生山線整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

## 多肥平塚遺跡

平成 29 年 3 月 31 日

編 集 / 発行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷 有限会社 中央ファイリング